

基本情報

■作者：斎藤弓弦(1881~1947) ■年代：明治後期~昭和初期

■寸法：縦220.0cm 横65.4cm



この資料のここがすごい!!

水しぶきを立てる養老の滝が美しく、描かれた人物の心境が伝わります。

お気に入りポイント

養老の滝の勢いと揺れて落ちる紅葉! 滝の音が聞こえてくる作品ですね。

学芸研究員
安保 智

学芸研究員の目

元正天皇にとって養老の滝との出会いは霊亀から養老に改元を行ったことから分かるように大きかったのだと思います。まさに心に残る風景になったのだでしょう。



女帝を喜ばせた美しい滝とその伝説

元正天皇との出会い

『続日本紀』養老元年(717)11月癸丑(17)条によれば、女帝である**元正天皇**^{*}は行幸の途中で美濃国(現在の岐阜県)の養老山を訪れる。天皇は養老山の霊泉で体を洗うと病気が治り、これを喜んで年号を霊亀から養老に定めたとある。いわゆる養老改元の詔である。元正天皇は**養老の滝**を深く愛したとみられ、養老2年(718)に再び訪れている。

天平12年(740)、元正天皇の後に即位した聖武天皇も養老の滝がある美濃に行幸している。この聖武天皇の行幸につき従ったという、大伴東人と大伴家持が詠んだ、養老の滝に関連した歌が『万葉集』に記載されている。養老の滝は、天皇だけでなく、当時の歌人たちにも感動を与えたのだろう。

孝子伝説とは?

美濃国に貧しい若者と老父がいた。若者は薪を拾って売り、米や老父のために酒を買って暮らしていた。老父は目が不自由で日々の酒だけが楽しみであった。ある日若者が山の中で転び眠ってしまったところ、夢の中で酒の匂いがした。目が覚めると香り高い酒が湧き出る泉があった。若者は喜んで老父にその酒を与えたところ、老父の目が見えるようになり、酒の水は不自由な体を治すことで有名になった。『十訓抄』では若者の名前は後代になって「孝子」とされるようになった。

たとしている。

養老伝説の初見は『続日本紀』の養老改元の詔とされているが、「孝子」の話はなく、美泉で若返る効果や薬効のある水が湧いていたと記録する。他にもこの泉の水を飲んだり浴びたりする者、ある者は禿げた頭に髪が生え、またある者は見えない目が見えるようになったという話もあって面白い。

作者の斎藤弓弦について

斎藤弓弦(さいとう ゆづる)は明治14年(1881)、宮城県伊具郡九森町に斎藤丈八の次男として生まれる。名は亀治。明治33年(1900)より帝室技芸員になり、やまと絵を復興させ、歴史画を得意とした小堀鞆音(ともに)に師事し、土佐派を研究する。斎藤が改元のきっかけとなった養老の滝を描いた背景には、歴史画を重んじた小堀に師事したことがあるとみられる。斎藤は数々の審査会に入選し、作品は東宮職・皇后職御用品ともなる。大正3年(1914)第8回文展で初入選し、その後も文展・帝展で活動の傍ら、教科書の挿画も手がけた。戦後は地元に帰って、創作活動に励み、昭和49年(1947)に93歳で亡くなった。

学芸研究員 安保 智
実習生 菅田 千恵

用語解説 詳しくはP27へ

*1 元正天皇
*2 養老の滝